# 【ねがいましては】

令和６年２月２６日　　*KYOWA SCHOOL*

第４０５号

「完璧な親に見える罪」

ある本の中に、「えっ」と思わせる記述があります。《「目的思考」で学びが変わる（千代田区立麹町中学校長・工藤勇一の挑戦）》［ウェッジ社］です。実はこの本、いろいろと私に貴重なことを提供してくれました。その中で、心に最も強く突き刺さったものをご紹介します。

ある日、筆者のお子さん、お二人いるそうです。そのうちの下の子が「幼稚園に行きたくない」とむずかったそうです。さて、当園拒否です。ここまででどのように感じられましたか？　学校であれば登校拒否です。どんな原因かをご想像ください。出ましたでしょうか。

筆者がその原因に気づいたのは、お子さんと一緒にお風呂に入っている時だったそうです。「お父さんね、ぼく、嫌いな子がいるんだ」と言います。なるほどそれが原因だったんだと筆者は気づきます。ここまでですと、その子はきっとその嫌いな子に会いたくないからが原因なのかな。または、その子に何か言われたり、されたりしているのかなと、お読みになっている方は想像されるのが一般的でしょう。しかしもっとほんのり温かい『奥』がありました。

実は、筆者の奥さん、その子のお母さんですが（筆者は照れくさそうに発言されています）。「私の妻はとても温かくて、誰に対しても優しく対応する人です。下の子はその姿を見て、『誰にでも温かく、優しくするべきなんだ』と信じて育ったのでしょう。幼稚園に行きたくないと言い出したのは、自分と合わなくて嫌いな子がいたことが原因でした。『誰にでも優しくしなきゃ』と思っているから、そうできない自分に苛立ってしまい、幼稚園に行きたくないと言ったんです。（中略）私は驚きながらも、幼稚園に行きたくないと言った理由が分かりました。それで『お母さんにも嫌いな人がいるんだよ』と教えてあげたんです。息子は『そうなの？』と驚いていました。」

どうでしょうか。私はこのエピソードを読んだ時、子どもってやっぱり『天使』なんだな、こころがポカポカするのを感じました。『しあわせ』ってこんな光景なのかな・・・。

お子さんは苦しんでいました。その原因はお母さんにありました。しかし、お母さんは何も悪いことはしていません。それどころか、世間的には１００点満点のお母さんですし、妻としても１００点万点でしょう。しかし、それが思いもかけないことに繋がりかねないこともあるのですね。

もし、お母さんが『いい人なんだけど、ちょっと頼りなくて、抜けているところがあるんだよね』くらいであったなら、その子はこのような苦しみに陥らなくて済んだのかな・・・。

筆者は、ある絵本に符合するとして、紹介されています。絵本作家の五味太郎さんの著書『じょうぶな頭とかしこい体になるために』（ブロンズ社）です。そのなかに、「大人だって嫌いな人はいるんだよ。でも、意地悪はしないし、会えばちゃんとあいさつもする」とあるそうです。

子に対して、「しっかりしなきゃ」「なにかやり残していないかしら・・・」

いつも１％でも、気が回らずにそのままになっていることはないかしらと、子への気配りに余念がないお母さん。それはひょっとすると、満点主義？　たしかに学校では１００点満点はすばらしいという印象を強く持ちます。しかしその満点にお母さんが見えてしまうことはややもすると、お子さんを逆に苦しめる要因になっていたという事例でした。

ひょっとすると、かえって『あぶなっかしいなあ』と感じさせてしまうくらいのお母さんの方が、けっこうお子さんはしっかりするものかもしれません。きっとお子さんはそんなお母さんを『たのもしいお母さん』と受け取ってくれるかもしれません。例えば、「おかあさん、明日遠足でね、おこづかい持って行っていいそうよ。だから５００円くれないかな。」で、おかあさんはお子さんへ、小さな財布にお小遣いを入れました。ところが遠足当日、子が財布を開けてみると、５００円ではなく、１００円玉ひとつ、当然大事件発生です。きっとその後のお子さんの行動は、そこまでの母子間の信頼関係がどのような状態であるかで、どうなったのか・・・。「またやってくれた！」それとも「絶対許さないから！」なのか・・・。

どんなお母さんが子にとって良いお母さんなんだろう。私は考える必要はないのではないかと思います。単刀直入に言います。『友達気分でいいんじゃん』と、「もう、頼りないんだから・・。」で結構だと思います。「私にまかせて！」「僕が自分でやるよ！」というお子さんが１００点かと・・・。

最後の結びにある言です。「うちの子がまだ１つか２つの、まだ歩き始めたばかりの頃。道で思いきり転んでも、私はできるだけ慌てず、駆け寄ることもしないようにしていました。そして、自分で立ち上がった息子に満面の笑顔を見せてやるんです。親が慌てると、子どもは泣きます。トラブルがあったときに親が慌てると、子どもは『一大事だ』と感じてしまうから。面白いもので、転んでも親がどっしり構えていれば、子どもは泣きません」

この言の『転ぶ』という行為を、『テストでとんでもない点をとった』に置き換えてみて下さい。お子さんのこころを泣かさないためにも、お母さん、お父さん、どっしり構えてください。お子さんが『一大事だ』と受け取ってしまったら、それは紛れもなく親の責任です。『慌てずドッシリ』です。